

サン・シモン再考

富岡勉

目次

1. 序
2. サン・シモンの思想の系譜
3. サン・シモンの科学主義・合理主義・産業主義と道徳
4. 自己愛と兄弟愛——新キリスト教
5. 空想的社会主義について
6. 現代への示唆
7. 結語

1. 序

サン・シモンは、彼の思想の柔軟性と、彼の弟子達、いわゆるサン・シモン派の思想と彼等の社会的地位からの憶測によって、非常に複雑な取扱いを受けている。共産革命の英雄の中に加えられて、モスコウのオベリスクの中にその名を刻み込まれている一方、弟子達の彼に対する神格的取扱いと名声利用により、右派としてもその名を列ねている。

このように彼の思想は巾広く、かつ、近代社会思想、特にマルキシズムに多大の影響を与えたのであったが、彼の生涯もまた非常に波乱に富んだものであった。アンリ・ド・サンシモン (Henri de Saint-Simon) は、1760年に、シャルルマーニュ大帝の子孫の貴族の子として生まれ、直情径行的性格のため、若い時——特に少年時代——には数々の奇行をしたといわれている。ディドロの協力者として百科全書の刊行に尽力した数学者・啓蒙哲学者グランベール (D'Alembert, Jean le Rond 1717~1783) に教育を受け、貴族階級の青年の当時の例にならって軍人となり、アメリカ独立戦争に参加した。この戦争においては、彼はアメリカ独立の目的に大いに刺戟を受けた。1789年のフランス革命にも参加したが、彼は革命に熱中するよりもこれを利用して土地投機を行い、大きい利益を得た。後に、この投機のため彼は投獄されて刑務所生活をしたが、1794年に解放されている。彼は革命中の振舞いがこのように芳しくなかったとして、伯爵の称号を棄てざるを得なかった。そして投機によって得た利益でもって文筆活動に没頭し、ラマルク (J. B. P. de Lamarek, 1744~1829) やカバニス (P. J. G. Cabanis 1757~1808) など、多くの学者達と交ることを得たのである。しかし、浪費癖のついた彼は、晩年乞食のような生活を送ったといわれている。1825年、飢えと貧しさの中で最後の息を引取った。

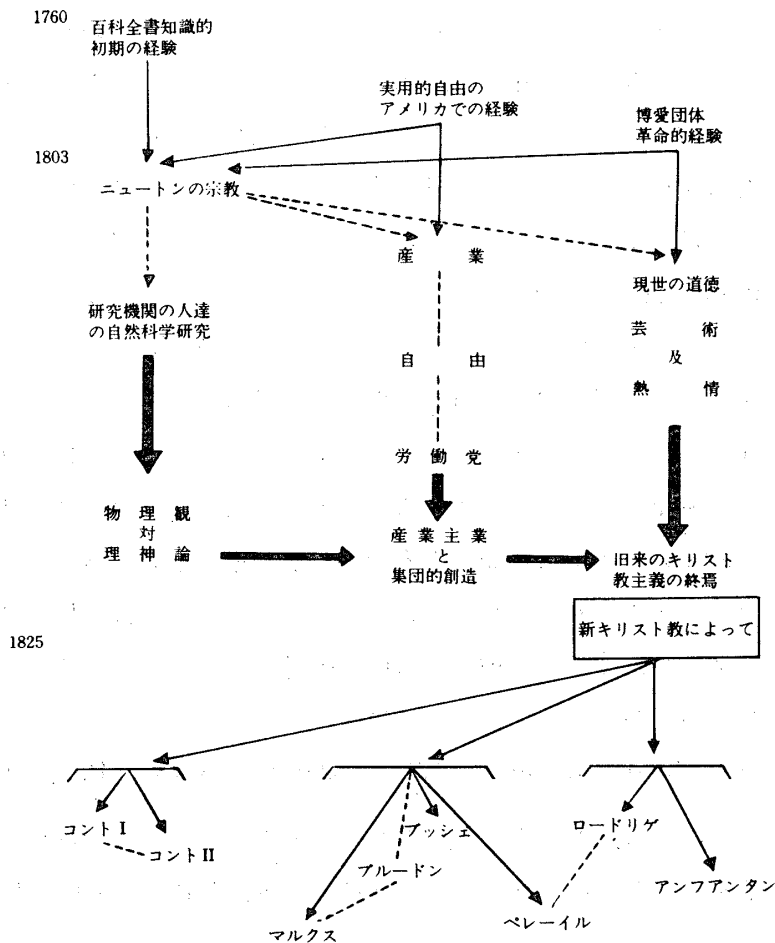
彼は単に、社会科学の分野から空想的社会主義者として取扱われ勝ちであるが、この常識化されている判断を、フランス産業革命胎動期において、彼がいかに実証的意識をもって臨んでいたかを知ることにより、いくらかでも彼を本当の姿において捕えることが出来、また、彼が科学主義・合理主義の限界をある程度予感していたため、反って、空想的と誤解されているのではないか、ということ、正にエンゲルスから見れば三文文士にも当らないようなものであろうが、もう一度探求してみようとするのが、この拙論の意図するところである。

2. サン・シモンの思想の系譜

先にも記したのであるが、サン・シモンは百科全書派的知識教育を受け、アメリカ独立戦争に参加し、フランス革命を経験したのであるが、このことが彼の思想に大きい影響を与えている。

彼の思想の系譜については、デスロシ (H. Desroche) が三つの部分 (une triple trilogie) に分け、「新キリスト教の起原と構造」(Genèse et Structure du Nouveau Christianisme Saint-Simon) の中で次のように図示している。(註)

サン・シモン「新キリスト教」の起原と構造



すなわち、これによればダランベールより教育を受けることによって、百科全書派的知識経験を心得て科学に対する目を開かれると共に、合理主義的思想の洗礼を受けるに至る。ニュートンの万有引力説に納得し、多くの学者との交際により自然科学研究に身を入れた。これが彼の思想の第一の系譜となる。

彼の思想の第二の流れは、アメリカ独立戦争にフランス将校として参加したことによって得たものである。彼はこの戦争から、戦争そのものが目的でなく、産業革命胎動期に入っているフランスに生きるとき、アメリカの実用的精神と自由の精神に多くの学ぶところを発見したのである。アダム・スミスの経済理論を学ぶと共に、アメリカの実用的精神から産業主義と科学主義と合理主義の調和を考えるに至ったのである。そしてこれらの主義を拒否し、権威主義を維持しようとするカトリック教会——とくにイエズス会——に対して攻撃の矢を放ったのである。

フランス革命における彼の経験は、彼の思想の第三の系譜を作っている。革命は革命本来の目的そのものから逸脱し、革命の混乱を利用して個人的恨みを晴らすことを目的として、報復行為が革命による処刑の美名のもとに横溢し、ラディカルに走り勝ちであることを経験した彼は、博愛と道徳を考えるに至る。破壊が残って革命本来の新しい建設が失われることを怖れたのである。これが、空想的社会主義者と決めつけられた大きい要因ではなかったろうか。フランス革命期において、カトリック僧侶達の保守的権威主義と科学と産業に対する不勉強と政治的道徳的退廃とを眼前にした彼は、旧来の保守的なキリスト教の終焉は、「新キリスト教」の提唱によって なし得る と考えたのである。

(註)

H. De Saint-Simon: Le Nouveau Christuanisme et les écrits sur la religion choisis et présentés par Herni Desroche P.12 Édition du Seuil. 1969, Paris

3. サン・シモンの科学主義・合理主義・産業主義と道徳

サン・シモンの受けた教育が百科全書派的であつたことは、その師ダランベールがディドロに協力して百科全書を刊行したことから判ると先に記したが、彼が科学主義者・合理主義者として世に出たことも、彼の思想の三系譜から推量せられるところであるが、ディドロやダランベール等の百科全書派の思想を伺うことによって求めてみたいと思う。

百科全書派 (Encyclopédiste) とは、百科全書に執筆協力した人達の総称であるが、この中で音楽を担当したルソー (J.J.Rousseau) は省かれている。百科全書の執筆者は約160名程といわれているが、彼等は中産階級の知的エリートが大部分で、これには高位のカトリック僧侶と軍人は加わっていないといわれている。彼等百科全書派は中産階級で生活が安定していたか

ら時間的経済的余裕があり、執筆活動に専念出来たのであって、カトリック教徒の多いフランスで、プチブル出身でプロテスタントのルソーは、彼等の仲間としては異質であって気が合わず脱落したといわれている。彼等は神学者、無神論者、唯物論者等種々の思想の所有者であったが、言論の自由、法の下における平等、人権の尊重を目標としたことにおいては一致していた。⁽¹⁾ そのためには、時の権力者であるブルボン王家とこれに取入るカトリック僧侶とに対する批判者であり、合理主義者であったわけである。地主で有閑人である貴族の権力に対し、財力を持つブルジョアジーの代弁者として平等の権利獲得を主張したのである。これが、人権尊重となって現われ、また、職業の自由となった。この平等思想は時の権威筋にとっては不快なものであるから、当然これらの抑圧の態度に出る。これに対して、言論の自由・思想の自由という要求となって現われたわけである。一方イギリスにおいては産業革命が進行し、フランスにおいてもようやくその兆しが見え初めた時代であるから、マニュファクチャーの発展と資本主義生産への移行の途が開けて来た時である。したがって取引の自由・生産の自由が問題とされ始め、そのため生産技術の能率化を追求せざるを得なくなって来ていたのである。この時期に、ディドロは百科全書において生産技術の項目を担当して、これを紹介する大事業をなしとげた。⁽²⁾ この意味において百科全書派の思想は合理主義思想であり、啓蒙思想であるといわれている。

彼等は、あらゆる現象は自然的原因から追求されねばならないとして、この追求の唯一の認識は科学によってなし得るとする。ここに科学主義がある。そして、経験的理性を重んじ、自然法則に基いて説明出来ないものについてはその信憑性を疑ってかかった。しかし、信仰については否定の態度はとらなかった。それは真の信仰は、従来のカトリックの信仰のようでなく教義に盲目的に服従せず、理性によって自由に論じ、悟性によって到達する原理に従うから、知的で実践的な徳であるというのである。⁽³⁾ ここに信仰の自由(tolérance)を認めるのである。したがって彼等は、世俗的活動を続けるカトリックの教会に対しては激しい攻撃の矢を放ったが、信仰そのものに対しては反抗しなかった。

このような百科全書派の知識を基礎として、サン・シモンは実生活にも科学主義を導入しようとした。そして社会関係を生理現象として考え、社会機構の問題を他の科学的問題と全く同じ方法で取扱おうとしたのである。ここに、社会学の萌芽を見受けることが出来る。旧来の体系を破壊するだけで止めおくのではなく、新しい体系を樹立しようとした。すなわち、彼は単に現実の生活や社会の組織を理性的な自然の合法則性と対比させて批判を加えるだけに止めたのではなく、社会には絶対的なものの発見だけでなく、歴史を通して相対的に時代の真理を追求していくべきものとしたのである。社会生活においては絶対的な合理性はなく、ある時代に合理性とされるものであっても、これが完成の限界に達した時、これを打破する新しい合理性が創造されていくという歴史的なものである、とみなしたわけである。歴史を通す時社会の発展は、理性の進歩の一つの現われである、と見たのである。これは、百科全書派の啓蒙主義からさらに一步前進していると言えないだろうか。

このような立場に立った彼は、産業革命胎動期のフランスにおいて産業を重視することも人

間性の現われと見た。産業重視は当然生産重視に連なって来る。そのことから働くという新しい道徳を生み、働かねばならないということに発展し、最も幸福な国民は、労働しない者が最も少い国民であるということになったのである。したがって、生産重視は必要労働従事者重視へと発展する。ここで彼は、生産従事者と非従事者とを区別する。生産者階級と非生産者階級の区別でもある。前者に産業者（農耕者・製造業者・商人）と銀行業者と科学者と芸術家を含め、後者に貴族階級と高位高官と高位僧職者を含めた。前者は労働することによって産業を盛んにし税金を納めるが、後者は労働をしないで支配階級として税金をむさぼり取っている、彼等は正に寄生者(hommes parasites)であって、寄生者が宿主を支配することは逆立ちした世界であると攻撃を加えた。生産者階級—産業者階級(classe industrielle)こそこの世の支え手であるとした。彼は資本主義社会への移行を予知していたと共に、銀行業者(banquiers)を考えたということは、資本主義社会の信用制度や金融資本主義社会の到来を予見していたとも考えられよう。彼は、産業が政治より前面に出ることを主張した。それは、最大多数を占める産業者を、いわゆる寄生者である少数の不労所得者としての非生産階級が支配することは、歴史的に見る場合不自然な姿であると見たからに他ならない。このようにサン・シモンは社会発展の原動力を産業と見立て、産業の基礎は科学であるとしたのである。そして社会はこれを歴史を通して見るとき、神学的封建的体制(systeme theologique et féodal) から形而上的法律的体制(systeme métaphysique et législatif) を経て科学的産業的体制(systeme scientifique et industriel)へと、三段階(des trois états)を踏んで進んでいると組織産業学(Du systeme industriel)の中で主張している。さらに彼は、有効労働による生産者である産業者階級が全社会を養う基本階級であって、これによって有閑階級である非生産者階級が排除され、前者によって企業が拡大されていくことによって、社会は改革——大革命——されるとした。ここに断つておかなければならないことは、彼の言う企業拡大は、非生産者階級の私有財産を増殖することを考えているのではなく、自分の肉体労働を売る以外に生きる途を持たない階級の境遇を、賃金の増収を計って改善することを目的としていたのである。そのために、各人はその能力と資力に応じて獲得する産業的平等(égalité industrielle)が認められ、支配者は労働者を支配するのではなく社会の管理人にすぎず、被支配者の利益と意志に基いて指導するという産業者の管理制度(régime administratif)が、権力国家の代りになり、これは一国だけでの実現によっては成功は難しく、国際的協力があって各国が同じように産業制度を確立して初めて、産業的平等と管理制度が達成されるという国際主義(internationalisme)的なものであると主張した。これら最大多数の産業的階級の最大利益を遂行出来る社会を組織するには、新しい道徳を必要とし、この道徳は、人間が互に尊重し合い助け合い愛し合う——兄弟愛であるとするのである。この兄弟愛は、神が行為の規範として人間に与えた原理であるというものである。これが「新キリスト教」である。

(註)

- (1) 百科全書 桑原武夫訳編 岩波文庫 p.213
- (2) 前掲書 p.295
- (3) 前掲書 p.214

4. 自己愛と兄弟愛——新キリスト教

サン・シモンが「新キリスト教」(Le Nouveau Christianisme)を提唱するに至った経緯をもう一度省みるならば、それはつまり、最大多数の産業階級の最大利益を追求出来る社会を組織化するのに必要だったからであろう。科学の進歩と新大陸の発見に伴い、社会の数多くの貧困者や最大多数を占める勤労者、いわゆる産業者階級の生活改善に努力することが、この世における人間のゴールであると教える道徳にキリスト教——特にイエズス会——を作り直すことが、義務であると彼は考えるに至ったからである。⁽¹⁾

彼は産業を拡大し企業を開発して、不労所得者の私有財産の増殖を意図したのではなく、産業者階級の賃金収入を増大し彼等の生活改善を行うことを目指したのであるけれども、本来は大衆の福音を計るべきカトリック教会が、科学に対し不勉強でこれを受け入れようとせず、また産業に対しても理解を示さず、いたづらに保守的な権威にすがりついて教義を一方的に押しつける態度を守り続け、一方、免罪符の利益を教皇は自分の家族や妹に浪費させるまでに至った。究極的には多数の貧困者の犠牲を軽減するに必要な科学の適用を、カトリック教会は意図的に妨害したのであるから、福音伝道に対する反逆行為をあえて行った異端者である、とサン・シモンはカトリック教会をきめつけたのである。

カトリック教会がなぜ産業文明を容認しなかったかは、おそらくカトリックの教義と産業とが調和しない点があると考えたからであろう。産業者は商品の生産と消費を増大することによって利益を獲得し、この利益によって生活を営むわけであるが、教会はこれに対して人間の地上の肉的慾望を満足させる消費尊重を許せなかったようである。利益をあげることは罪の淵に沈淪するものに外ならないと考えたようである。そして産業軽視の態度となった。しかし現実社会の流れは、カトリック教会の軽視する産業が時々刻々発展を続け、産業なくして人間の生活が成立しなくなるような状況となり、あえてこの社会の推移に目をつむって福音を古いものにしばっておくことは、も早や不可能な時に来ていたのである。

サン・シモンはこの中であって、彼の生涯の希望は「人類に役立つ科学的業績を行うこと」(Faire un travail scientifique utile à l'humanité)であった。そして、科学と信仰との調和にキリスト教を道徳として受容することであった。1821年頃、彼は宗教的・道徳的感情を強調した。そして、初期のキリスト教伝道者の博愛主義を礼賛している。彼は人間は二つの根本的な力によって動かされるとし、その一つは自己愛・自己利益・自己名誉であって、これと同時に、他

の一つは博愛・兄弟愛・同情・人道主義であるとする。しかし、彼が科学の進歩に対して人々の目を開こうと計画した当初は、前者に重点をおいていた。「ジュネーブ人への手紙」(Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains)を書いた頃は、自己愛、自己利益の側に基礎をおいていた。丁度その頃彼はアダム・スミスやベンタムの功利論に賛成していた時代である。つまり、

有産階級の人々は、自分達の富を享楽するために革命から安全でありたいと望み、富の増殖を求めた。無産の人々は、大砲の餌食として使用されないように平和を望み、より広大な物質的繁栄を望んだ。知識階級の人々は、自分達の才能をためす機会が得られるから、科学探求に興味を持った。あらゆるこれらの利益というのは、もし正確に理解されれば、お互いに調和された状態にある。本能的にまたは合理的に利益を理解しているように、それぞれ、自分達の利益を求めているこれらの各階級に属している人々は、同じ結論に達するであろう——この場合はニュートンの宗教であるが。⁽²⁾

というのである。とくに、各階級の経済的利益を訴え続けていた。しかし、1821年の「組織産業学」を世に出す頃になると、後者、すなわち、博愛・兄弟愛に重点をおくように変化してきた。個人や階級の経済利益にかかわらず、仲間・人類に対する人間愛を訴えるようになった。これは、人道主義は、階級や他人の利益を超越するという彼の考えからである。そしてこの頃から彼は、新キリスト教という言葉を使用し始めている。彼の死の直前に出版された「新キリスト教」に、その思想が凝結されているのである。

この作品は初めは、「文学上、哲学上並びに産業上の意見」(Opinions littéraires, philosophiques et industrielles)という、二巻からなる随筆として出版するよう企てられた。しかし彼は政治的・道徳的危機の緊急性に鑑みて、これを単独で発行するようにしたのである。「新キリスト教」は、対話(dialogue)でもって始められている。保守主義者(le conservateur)と新キリスト教徒である革新主義者(le novateur)との対話である。それは次のような言葉のやりとりでもって始まる。

保守主義者： あなたは神を信じますか。

革新主義者： ええ、神を信じます。

保守主義者： キリスト教が創造の神をもっていることを信じますか。

革新主義者： はい、信じます。

(筆者により訳を省略)

保守主義者： あなたが神と信じる宗教のやり方はどんなものですか。あなたが人間として考えるものはどんなものですか。

革新主義者： 神は次のように言っておられます。すなわち、「人は他人をも兄弟として取扱わなければならない」(Les hommes doivent se conduire en frères à l'égard

les uns des autres.)と。この崇高な原理は、キリスト教の中に神が在すことを全部含んでいます。

.....

彼によれば、キリスト教は一つの黄金律⁽³⁾の中に要約されているというのである。このような対話を続けている内に、保守主義者が抵抗を強く感じないで、彼等の信仰が転換させられていく過程を推進している。そしてキリスト教は、神性の啓示によって振り起されねばならない宗教である、という証しをもって終っている。彼にとっては、科学的知識が宣教者にとっての大きい必要条件であったとしても、も早や、キリスト教を一般的な科学の単なる表現として扱わなくなった。キリスト教の本質はその道徳的内容であった。こうして新キリスト教は、実証的な科学の真理と、あらゆる時代あらゆる階級を通して、絶対的な道徳原理——兄弟愛——に基づいてまとめられたものであった。

(註)

(1) Manuel: The New World of Henri Saint-Simon, Harvard 1956 p.355

(2) Ibid. p.352

(3) ローマ人への手紙第12章10節、同第13章9、10節、マタイによる福音書第19章19節、同第22章35節

5. 空想的社会主義について

サン・シモンの思想はフーリエやロバート・オーエンと共に、マルクス・エンゲルスによって空想的社会主義と批判されたことは周知のところであろう。それ以来マルクス・エンゲルスの称する科学的社会主義に対し空想的なるが故に、その比重は軽く取扱われるのが通例のようである。比重の軽重はともかくとして、いま一度、マルクスやエンゲルスが空想的と判断した跡を振り返ってみたいと思う。

「共産党宣言」の中の「批判的・空想的社会主義および共産主義」の章を通し、サン・シモンが批判されたのは彼の死後22～3年を経てからである。マルクス・エンゲルスの言うところは、次の三点にまとめることが出来るかと思われる。すなわち、

A. サン・シモンの時代は、まだプロレタリアートとブルジョアジーとの闘いが、十分熟していない段階であったので、階級対立や、支配階級内部の解体的要素は認めていても、プロレタリアートの歴史的独立性や独自の政治的運動もみず、社会的活動の代りに個人的発明活動が登場し、プロレタリアートの階級への組織の代りに自分の考え出した社会組織が登場して来ている。

B. プロレタリアートはもっとも苦しんでいる階級であるが、空想的社会主義者は、自分達は階級対立を超越した存在だと思っている。したがって、第三者的立場から社会のあらゆる成員の生活状態を改善しようとして、無差別に全社会にむかって、とくに、支配階級にむかって、苦しんでいる階級の生活改善が行われるよう呼びかけている。そのため、革命的行動を排斥して実例の力によって、新しい社会的福音のために道をひらこうと試みている。

C. 階級対立が始まったばかりであるから、空想的社会主義者の思想は現在の社会のあらゆる基礎を攻撃し批判的である。これは、労働者の啓蒙のためには貴重な材料を提供するけれども、その資料は階級対立の消滅を現わすものであるから、始まったばかりの混沌とした階級対立の姿だけを対象として述べていることになって、科学的なものとはなり得ない。⁽¹⁾

ということであるから、当然空想的と言わざるを得ないと主張している。

またエンゲルスは、共産党宣言からさらに約40年経た後、「空想から科学への社会主義の発展」の中で、

サン・シモンなどは、歴史的に発生して来たプロレタリアートの利益代表として現われたのではなく、単に啓蒙主義者として、全人類の解放を望み、理性と永遠の正義との王国を実現しようとした。そして、未発達な経済的関係のうちに隠されていた社会問題の解決には、実例が乏しいから、頭の中から作り出さなければ不可能であった。すなわち思惟する理性の任務であった。だから、社会制度の新しい完成した一つの組織を発見して、これを宣伝し、規範的実験例によって、おしつけざるを得なかった。したがって、ユートピアとならざるを得ないのである。⁽²⁾

と述べている。

要するに、「社会主義を一個の科学たらしめるためには、それがまず現実的基礎の上に置かれなければならない」⁽³⁾ のであるが、それがサン・シモンの思想には欠如し、「世界解放事業を成就することが現代プロレタリアートの歴史的使命であり、この歴史的條件、それとこの性質そのものを究明すること、そして行動する使命をもった今日の被抑圧階級に対して、彼ら自身の行動の条件とその性質を意識させることが、プロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主義の任務である」⁽⁴⁾ のに、サン・シモンの思想にはこれがなされていないから空想的であり、彼の社会主義は、彼だけの絶対真理、理性、正義で、彼の主観的な理解力、彼の生活条件、彼の知識と思索的訓練の程度で制約⁽⁵⁾ されるので、客観性の欠如した非科学的なものであると批判しているのである。

(註)

(1) マルクス・エンゲルス選集 5 新潮社版 昭和47年 相原茂訳を参考とした。

(2) 世界大思想全集 社会・宗教・科学 13 河出書房 昭和36年川口武彦訳 p. 6

(3) 前掲大思想 p.13

(4) 前掲大思想 p.36

(5) 前掲大思想 p.13

6. 現代への示唆

以上において記して来たように、サン・シモンの思想はマルクス主義者によって空想的ときめつけられてしまっている。この批判を今さらあえて再批判し、彼の社会主義は科学的であると主張しようとは毛頭思っていない。また、わたくしの知識と学力とではそのように到底主張し得る程のものでもない。ただ、マルクス・エンゲルスの彼に対する批判以後現在に至るまでのマルキシズムの歩んで来た実証的現実を振り返り、わたくしの疑問を曝け出してみたいと思うのである。わたくしはマルキストでもなければアンチ・マルキストでもない。一介の研究生にすぎず、研究中に生じた誤解、理解不足、学力知識の不足のしからしめるところであることを承知で、先輩の方々のご教示を願うための疑問提出である。

エンゲルスは「空想から科学への社会主義の発展」の中で、社会主義を一個の科学とならしめるためには、現実的基礎の上におかれていなければならないと述べている。社会科学において現実的基礎の上で追求するということは、現実の連続である歴史を通して現実を追求することがその途であろうかと思われる。この実証的方法は、マルクス・エンゲルスによって最初に試みられたというよりも、すでにサン・シモンが、人間の歴史を科学と産業の進歩の歴史として考察し、神学的封建的体制・形而上的法律的体制・科学的産業的体制の三段階を踏んで進展していると指摘したところは、われわれのすでに見て来たところである。彼は人間の進歩の歴史が人間の意志如何にかかわらず、このような段階を経て進歩することが自然運動であるとしたもので、おそらく、彼の思想を研究したマルクス・エンゲルスは、直接これを取扱っているようには見受けませんが、人間の進歩を歴史を通して見るのが、現実的基礎をふまえる実証的方法として最も妥当なものと認めたが故に、彼等も階級斗争の歴史と言うに至ったのではないかと推量することは無理であろうか。

次に、サン・シモンは生産者階級と非生産者階級とに区別したけれども、このことからマルクス・エンゲルスは、プロレタリアートとブルジョアジーの階級区分に発展させたとみられよう。彼等が人類の歴史を階級斗争の歴史としたことは、サン・シモンの歴史観と階級観に示唆を得ること⁽¹⁾が多かったのではないだろうか。サン・シモンが科学と産業の社会を推進する者は産業者であり、労働する人が中心であるべきことを主張して、「ジュネーブ人への手紙」の中で、「すべての人は働かなければならない」と言ったことは、「働こうとしないものは、食べることもしてはならない」⁽²⁾という聖書の聖句から引き出して、ソビエートの教訓とさせるに至ったとも考えられよう。また、社会主義社会と共産主義社会との違いについて、社会主義社会

は各人の能力に応じて働き能力に応じて獲得する社会であり、共産主義社会は態力に応じて働き必要に応じて獲得する社会である、と一般にいられているが、サン・シモンが「組織学」(Organisateur)において、各人はその能力と資力に応じて一定の重要性と利益を獲得するものである、と産業的平等について述べているのを考えあわせると、社会主義社会と共産主義社会の区別の源泉も何処から 生じ来たものか 推量出来そうである。

マルキシズムが社会の構造を上部構造と下部構造に分けて説明したことは余りにも有名であるが、エンゲルスがサン・シモンについて、

1816年に、彼は政治学は生産に関する科学であると宣言し、政治学は経済学の中へ全く解消されることを予言している。ここでは、経済的狀態が政治的制度の基礎であるという認識が、やっと萌芽的に現われているにすぎないが、人間に対する政治的支配が物の管理及び生産過程に推移すること……………⁽³⁾

と述べていることから推し測れば、下部構造を経済を土台としたマルクス・エンゲルスの考えの源が、サン・シモンに求められると言っても差支えないのではなかろうか。

さらに、レーニンが、共産主義社会が完成のあかつきは「国家は消滅する」と述べたが、これはサン・シモンについてエンゲルスが、「国家の廃止」が明らかに述べられていると「空想から科学への社会主義の発展」の中で記している⁽⁴⁾ことと関連させて考察すると、このこともサン・シモンの影響があったと伺えそうである。ただしかし、サン・シモンは管理制度が進んで権力国家は消滅し、産業者による管理国家がこれに代るとしたのであるが、プロレタリア独裁の社会が完成すれば国家は消滅する、という方向に進展させたのはレーニンであろう。

エンゲルスが、サン・シモン等の空想的社会主義者は自分達の社会主義は絶対的真理の表現であると信じていたけれども、それは彼等にとっての各人各様の絶対的真理であって、科学的な客観性のある真理には到達していなかった、と指摘したことは先にも見たところである。マルクス・エンゲルスが、空想的社会主義ときめつけたことは、これを裏返せば彼等の社会主義こそ科学的であると証明するためのものに他ならなかったといえよう。すなわち、絶対的真理としての社会主義は、科学的社会主義以外にあり得ない、ということに他ならないであろう。社会科学の分野において、科学的社会主義が絶対的真理として何時まで生命を全うするかは、これからの歴史が語ってくれることとなるであろう。

上部構造が下部構造を土台として制約を受けるとすれば、下部構造が共産主義を基調とすれば上部構造も自づと共産主義的な制約を受けざるを得なくなるであろう。ここに思惟・思想の自由の制約が考えられる。人間の思惟や思想が流動的であることは言うまでもなかろう。エンゲルスの言うが如く正に各人各様である。しかし、下部構造を構成するものが絶対的なものである場合は、思惟・思想に制約の及ぶ危惧がないとは言えないであろう。そして、思惟・思想が固定化され、標準枠内でしか思惟・思想の発表が許されないような管理体制が強力になれば、社会的危険が底に流れる危惧があるかもしれない。すると益々この社会的危険を排除しようとして、管理体制の強化が進行する可能性があるであろう。このことを明らかに予見したか

どうかは定かでないけれども、サン・シモンが「新キリスト教」において絶対性を思惟・思想を超えたものに求めようとし、精神構造の変革を考えたことは、彼なりに危機観を感じ取ったのではなからうか。科学的たり得るために科学主義万能となり、教条的官僚主義社会となり、社会硬直化による弊害を避けんがために、サン・シモンは、管理的産業的社会を志向はしたけれども管理体制の過度の強化を危惧し、精神変革を持込むことによって、コンミューンの管理者として、精神的統制者と社会的統制者との二者を考えたのではなかったらうか。

共産党宣言が掲げる10方策⁽⁵⁾の実現へとソ連邦は努力しているのであらうが、マルクス・エンゲルス、あるいはレーニンの画いたビジョンと、ソ連邦の現在の実状とはいささか隔りのあるように見受けられる。マルクス・エンゲルスがサン・シモンの社会主義を批判したのは、彼の思想が世に問われてから20～40年の後であり、社会は産業革命とフランス革命を経て、大きく変化しつつある時期であった。いま、マルキシズムが世に出てから約100年、ロシア大革命より60年を経て、第二次産業革命と称される程の急テンポで変化しつつある社会である。その中において結論めいたことを記すのは早計の誘いを逃れないが、現実のソ連邦の実状からすれば、マルキシズムはいささかユートピア化の方向に押しやられつつあるのでなからうか。必ずしもソ連邦の現在の姿が一番正しいとも思われないが、ソルジェニーツィン氏等に対する国外退去要求や、チェコスロバキヤとかユーゴーに対する力の政策を見るとき、藤井一行金沢大学助教授の言われる如く⁽⁶⁾、1936年のソ連憲法で保証する市民的自由、マルクス・レーニン主義の自由理論からそむいている、と言わなければならないようである。マルクス・レーニン主義の自由理論をユートピアの彼方に、押しやりつつあると言ってもいいかもしれない。ソビエートマルクス主義の、抑圧的工業社会のイデオロギーを見る限りにおいては、H・マルクーゼの言うが如く、再び科学からユートピアへの批判が生れてくることもうなづけるようである。マルキシズムの理論的実証的科学行動の現実であるソ連邦が、自由について本来のマルキシズムから遊離しつつあることは、サン・シモンが空想的社会主義と批判された過程を再考する時、我々に多々示唆するところあると反省を要するのではないだらうか。

(註)

- (1) 前掲大思想 p.8, 9
- (2) 新約聖書 テサロニケ人への第二の手紙第3章10
- (3) 前掲大思想 p.9
- (4) 前掲大思想 p.9
- (5) 前掲マル・エン選集5 p.22
- (6) 現代と思想第16 1974年6月青木書店 p.246 「マルクス主義と市民的自由」

7. 結 論

サン・シモンに対する批判は、マルクスによって徹底して空想的と決めつけられ、エンゲル

スによってある程度名誉回復的な評価を受けたけれども、彼等の言葉をもって十分に事足りるとみなされてか、マルキシズムの側からは余り深く彼の思想については、追求が続けられていないように見受けられる。サン・シモンはどれ程か、社会の科学的認識方法や現実の歴史的観察の影響をマルクス・エンゲルスに与えたことであろうか。また、今日ではあたかもマルキシズムの独占語とまでみなされ勝ちな名句の数々が、サン・シモンからのヒントによるものであることも知り得た。彼が社会学の基礎を拓いた一人であることが評価されながらも、社会科学分野においての絶対的真理の追求において、その主観性をとり上げられてユートピアと評価されたのであるが、社会の認識に経済的な観察の仕方と科学的な追求の方法を示唆したことは、彼の名声を決して低下させるものではなかろう。ユートピアから科学への途だけが社会認識の唯一の絶対的真理かどうかは、これからの歴史が決定してくれるところであろう。ユートピアから科学への旗印がむしろ錦旗のみ旗として信仰化されないことを念願している。サン・シモンの思想がサン・シモンニヤンによって次第に神格化され中心からそれて行ったと同じ途を、マルキシズムもたどらないように祈っている。

サン・シモンの思想がユートピアであったとしても、多くの実証的研究によって示唆を与えヘーゲル哲学やイギリス経済理論と共にその土台の一石となったことは、マルキシズムにとって否定することの出来ないものである。しかも、マルキシズムの行動科学的性格を有するソ連邦の現実が、自由理論の立場から批判の言葉を投げかけられていることから、サン・シモンの予見がすでに何かを示していたのではなかったろうか。科学性管理性の徹底を計ることは、一面に目を徹しても他の一面には目をおおい勝ちな人間の欠点を引き出し、ファッシズムの犯した過誤を再びたどることにはならないだろうか。

サン・シモンの投げた問いの中から、濾過器を用いて科学性を濾過し、濾過紙に取り残された残渣の中から再び拾い上げるべきものがないかを再考し、現社会に対して全く不必要なものであるかどうかを検討することも、あながち無駄なことではなかろう。ヘーゲルやサン・シモンのいう歴史は、マルクスにとってはも早やすでに前史でしかあり得なかったかもしれないが、ひるがえって、マルクスのいう歴史は、現在のソビエトマルキシズムにとっては果して前史となるかどうかは、今後の歴史に待つところであろう。ソ連邦の現状とマルキシズムの隔りは、サン・シモンがすでに早くから予見して、われわれに示唆したところのもの一つの現われであるかもしれない。彼はこの世の現象面のみを追い求め、その矛盾を治療することに精力を費して効果を求めることよりも、一人一人の人間を根源から治療することを求めたのであろう。産業者階級の生活条件改善を志向したけれども、さらに後年に至って、表面的な生活条件改善よりも一歩人間の内的条件に迫り、人間一人一人の命の根源から医すことを求めたと言えるのではないだろうか。